

家族のための ひきこもり 支援ブック

保存版

中高年向け



ひきこもっている状況
体験者インタビュー
相談窓口のご紹介

香川県「ひきこもり対策推進事業」受託事業

相談窓口ってなに？

香川県ではひきこもりに関する相談窓口を県及び市町に設置し、ひきこもり対策に取り組んでいます。ご自身やご家族のひきこもりについて、悩みを抱えていませんか。ひきこもりは誰にでも起こりうることで、特別なことではありません。ただ、回復には、時間と周囲の理解とサポートが必要です。自分では些細なことだと思っても、医療の助けが必要なこともあります。ご家族で抱え込まず、まずは身近な窓口にご相談ください。

どんな風に相談するの？

下記の相談窓口にお問い合わせいただくと、相談員がご本人・ご家族の状況やお気持ちをお聞きして相談に応じるとともに、状況に応じて適切な相談機関や支援機関を紹介いたします。また、必要に応じて同行・訪問支援も行ってまいります。ご相談は無料です。

香川県内の相談窓口リスト

お気軽にお問い合わせ下さい。

● 香川県ひきこもり地域支援センター「アンダンテ」 対象：県内全域

[所在地] 高松市松島町1丁目17-28

(ことでん瓦町駅から徒歩10分、ことでん今橋駅から徒歩5分)

[受付時間] 月～金曜日8:30～17:15 (祝休日・年末年始をのぞく)

[電話番号] 087-804-5115

● 東讃保健福祉事務所 対象：さぬき市・東かがわ市・三木町・直島町

[所在地] さぬき市津田町津田930-2 (JR 讃岐津田駅すぐ)

[受付時間] 月～金曜日8:30～17:15(祝休日、年末年始をのぞく)

[電話番号] 0879-29-8263

● 小豆総合事務所 対象：土庄町・小豆島町

[所在地] 小豆郡土庄町湊崎甲2079-5

(八幡橋前バス停から徒歩5分、土庄本町バス停から徒歩7分)

[受付時間] 月～金曜日 8:30～17:00 (祝休日・年末年始をのぞく)

[電話番号] 0879-62-1373

● 中讃保健福祉事務所 対象：丸亀市・坂出市・善通寺市・綾歌郡・仲多度郡

[所在地] 丸亀市土器町東8丁目526 (JR 宇多津駅より徒歩15分)

[受付時間] 月～金曜日8:30～17:15 (祝休日・年末年始をのぞく)

[電話番号] 0877-24-9963

● 西讃保健福祉事務所 対象：観音寺市・三豊市

[所在地] 観音寺市坂本町8丁目3-18 (JR 観音寺駅から徒歩10分)

[受付時間] 月～金曜日8:30～17:15 (祝休日・年末年始をのぞく)

[電話番号] 0875-25-2052

● 高松市保健所 健康づくり推進課 対象：高松市

[所在地] 高松市桜町1丁目9-12 (保健センター内)

(ことでん栗林公園駅より北へ徒歩4分、JR 栗林駅より南へ徒歩5分)

[受付時間] 月～金曜日 8:30～17:00 (祝休日・年末年始をのぞく)

[電話番号] 087-839-3801

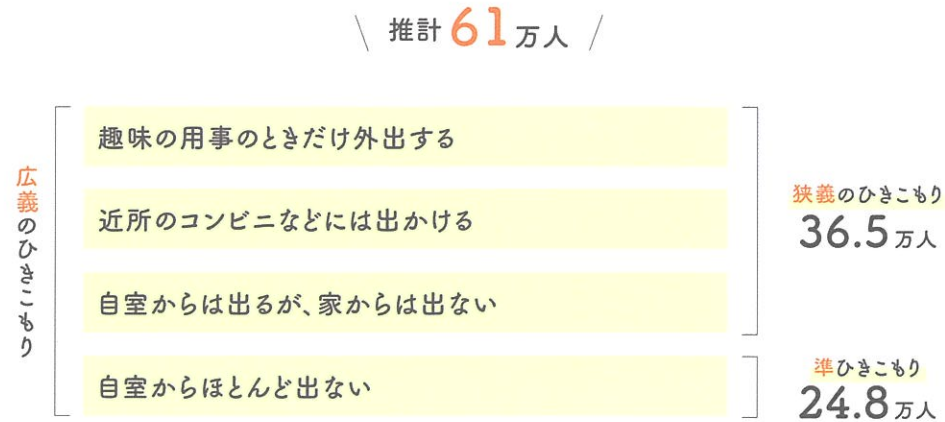
こんなお悩み
ありませんか？

ひきこもっている
子どもとどう接したら
いいですか？

ひきこもり
になったんですが、
支援先ってどうい
うところがありますか？

ひきこもりの
子どもを持った
親が集まる場所が
あれば教えてほしい。

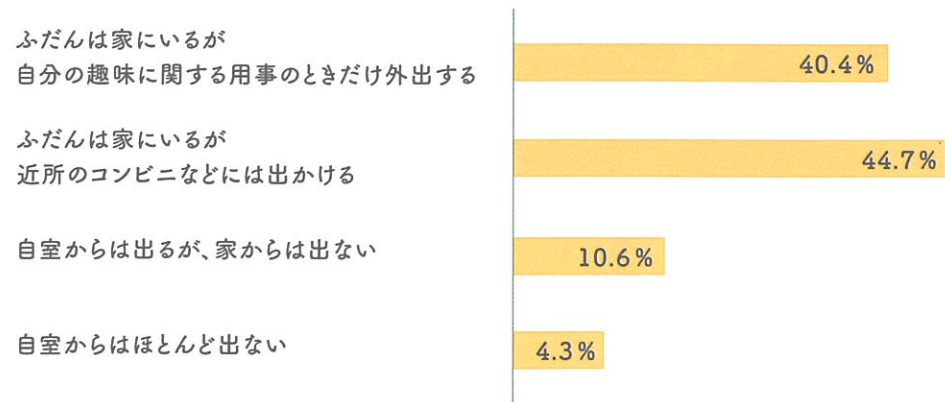
Q. 中高年のひきこもりの推計人数は？



出典: 内閣府が平成30年度に満40歳から満64歳までを対象に実施した「生活状況に関する調査」(その他、無回答を除く上位を抜粋)

上記のいずれかに当てはまり、かつ6ヶ月以上その状態であることが「ひきこもり」とされています。

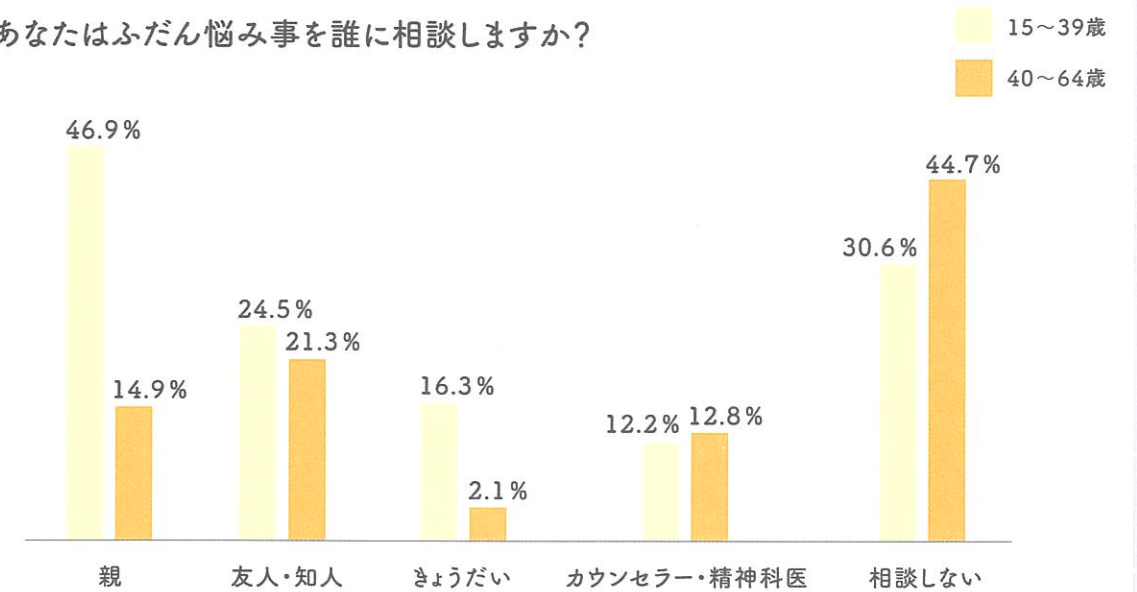
Q. 普段の外出頻度は？



出典: 内閣府が平成30年度に満40歳から満64歳までを対象に実施した「生活状況に関する調査」(その他、無回答を除く上位を抜粋)

ひきこもりだから全く外にでないというわけではありません。

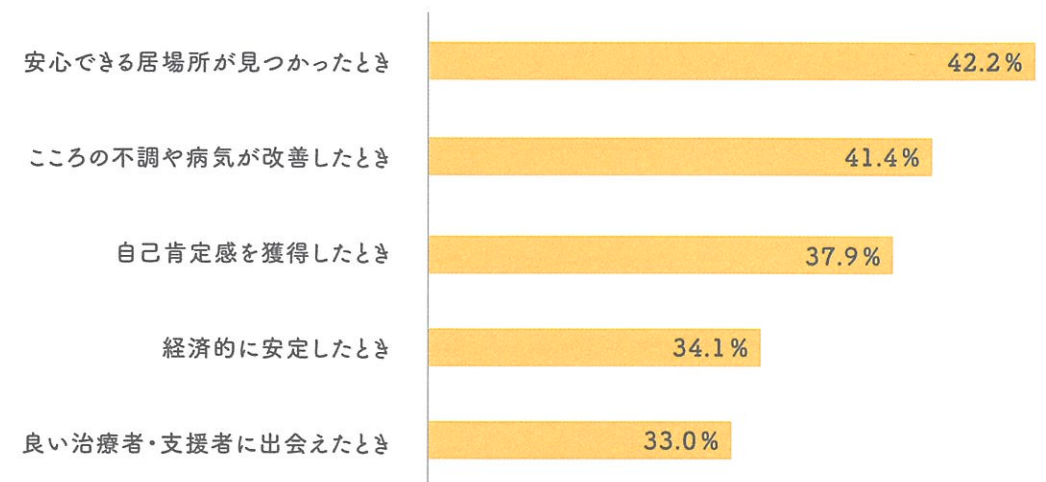
Q. あなたはふだん悩み事を誰に相談しますか？



出典: 内閣府が平成30年度に満40歳から満64歳までを対象に実施した「生活状況に関する調査」
内閣府が平成27年度に満15歳から満39歳までを対象に実施した「若者の生活に関する調査」(その他、無回答を除く上位を抜粋)

40代以上になると、親・きょうだいなどの身内に悩みを打ち明けなくなります。

Q. どのような変化によって生きづらい状況が軽減または改善しましたか？(複数回答)



出典: 一般社団法人ひきこもりUX会議「ひきこもり・生きづらさについての実際調査(2019)」

人とのつながり、精神面・経済的な安定によって軽減・改善される傾向が見られます。

生きる意味を考える事もしんどく、 自殺を考えてもそれに至る 労力さえ考えたくない程でした。

— ひきこもり本人 Aさん(50代)



職場環境が厳しくうつ病を発症

初めてうつ病と診断を受けたのは39歳のことでした。その頃は小売業の営業職をしていました。職場は、販売のノルマが厳しくパワハラが常態化しているようなところでした。段々と睡眠がとれなくなり、お酒に頼り飲酒量が日増しに増えました。ただ生きる事が辛く、精神的に深く落ち込みました。

ある朝、無断欠勤をし家に戻った私の様子がおかしい事に気づいた同居の父親に連れられ心療内科を受診しました。それまでの苦しさや辛さに診断名がつくと、なぜか腑に落ちたのを覚えています。その後、私なりの経験を踏まえて何かではいけないか?と考え、精神保健福祉士の資格を取得し、再出発として精神科病院に就職しました。それが42歳の頃でした。

まさか、その1年後にうつ病を再発すると思っていませんでした。

病気を再発しひきこもり生活へ

43歳の夏頃、腹痛や下痢が続く、病院にて検査を受け、うつ病の再発を指摘されました。4年に渡り定期的な診察を受け、薬物治療も継続的に受けていたので、その時は納得できずパニックになり、責めるべき相手では無い主治医や薬物治療に対して不信感を抱きました。ずっと飲み続けていた薬は、なんの効果もなかったんじゃないかと。ショックはかなり大きく、それから通院も薬物治療も自己判断でやめてしまいました。今となっては判断を完全に誤っていたと思います。外の世界を遮断し、同居の父親も完全無視しました。どんどん生活は荒んでいき、生活機能は落ち込み、健康保険の手続きもせず、無保険の状態になりました。

生きる意味を考える事もしんどく、自殺を考えてもそれに至る労力さえ考えたくない程でした。毎日が、何も考えないままテレビで動いている人達を眺め、夜になると暗く静かな部屋の中、先々が怖くなり多量に飲酒をして酩酊状態で寝付き、二日酔いで起きる。そんな生活を繰り返し、3年近くたちました。その状態でも私が命を絶とうとしなかったのは、近くで何も言わずに見守ってくれた父親が理由でした。話をすることは一切ありませんでしたが、そんな中でも「おはよう」と毎日声をかけてくれたのです。

テレビ番組をきっかけに友人に相談

あるときテレビから、アドラーの「人生の意味の心理学」という本を紹介する番組が流れてきました。「人生についての意味づけを変える」ことは自分にとって大切な考え方もかもしれないと思い、思考も少しずつ前向きになり出しました。徐々ではあっても回復過程にあった私は、社会復帰ということをなんとなく視野に入れ始めました。

しかし、全ての社会的な繋がりを絶ち、医療とも繋がりを絶っていましたので、どうしたら社会復帰できるのかわかりませんでした。そこで更なるキッカケをくれたのは友人でした。友人は、私からの返事を期待せずに定期的に声をかけてくれていました。そんな友人に、ひきこもって以来初めて返信しました。するとその友人は、知り合いの精神保健福祉士がいるので相談してはどうか、と助言をくれたのです。その精神保健福祉士と会う機会を得て、今までの状態と社会復帰への不安を相談すると、次はひきこもり支援している人を紹介します、と言われました。「ひきこもり」という言葉を聞いた時、初めて「私はひきこもりなんだ」と衝撃を受けました。私の「ひきこもり」のイメージは、若い世代が思い浮かび、社会との関わりが上手く取れず、家族の関係性も上手くいっていない方々…といった程度のものでした。しかし、自分に当てはめると、私の状況そのものである事に初めて気づいたのです。

そのひきこもり支援の方と、私が47歳の頃に初めてお会いしました。まだ漠然とした社会復帰としかその先を捉えておらず、漠然とした不安を訴えるだけでしたが、「就職の線が見えてきましたよ」「わかりやすい話し方されますね」といった一言一言が、どれだけ私を安心させてくれたか言い表せません。先々が決まった訳でもないのにこれからの展開が上手くいくのではないかと、という落ち着いた気持ちになっていました。そうは言っても就職活動など活動的になっている訳でもありませんでしたし、具体的にどう進めていくか悩んでいた時、強烈に背中を押してくれた大きなキッカケがありました。母親が亡くなったのです。

母親の死に背中を押された

母親は18年前に若年性アルツハイマー認知症と診断されてから亡くなるまで、父親が老々介護で看ていました。母親は約7年間寝たきりになっていましたので、父親は母親の介護で必死な状態でした。私が殻に閉じこもっていた3年弱の間、父親は母親の介護をし、私をそっと見守ってくれながら、危険な環境の中、必死に耐えていました。やっと私の精神的な状態が上向き、ホッとするのも束の間、献身的に尽くして介護していた母親が逝ってしまいました。葬儀を済ませ、四十九日法要を済ませた時に、ハッキリと背中を押された気がしました。勇気をもって一歩進みなさい、と。その時に思い出したのが、相談していたひきこもり支援している彼の姿でした。その事業所のお手伝いでもなんでも、なにが自分出来る事はないかと居ても立ってもいられない思いになり、その思いだけを直接本人にメッセージでぶつけました。身勝手な思いだったと思いますが、彼は真剣に話を聞いてくれました。その時点までにお会いしたのは2回。よく話を聞いて頂けたと思います。切羽詰まっていた。藁をも縋る思いでした。

今まで話した様に、私には繋がりと呼べるものが大変薄いです。そんな中、友人が紹介してくれた方の、そのまた紹介で出会えた方のおかげで今の自分があります。当時母の死をきっかけに、相談する決心をしたことで私の人生は大きく変わったと思います。

ひきこもり始め、気づけば14年の歳月がたった

わたしがひきこもる原因となった出来事は、26歳の時に起こりました。父が亡くなり、親族との金銭トラブルに発展し、人間不信になったのです。肌荒れもひどくなり、身体的にも精神的にもボロボロになっていました。その後4年をかけて、だんだんと職場にも行けなくなり友達から電話がかかってきても取らなくなり、周りの人間との関係が途絶えました。

ひきこもり始めた最初の4年間は、病気の祖父を介護する目的で祖母と同居していたのですが、そんな生活を続けていくうちに、介護疲れを感じ始め、さらに精神を病んでいきました。また、発症していた肌荒れも、自己判断で薬をやめてしまっていたこともありどんどんひどくなっていました。その後祖父が亡くなり3年たった頃、少しずつ体調が回復してきたこともあり、そろそろ働き始めようかと考えハローワークに足を運んだときに、事件が起こります。

ハローワークの担当者と話していると、異常に緊張して汗が止まらなくなってしまったのです。その時はじめて「ああ、自分はおかしくなっているんだ」と実感しました。そして、7年間人との関わりがなく、家族以外とコミュニケーションを取っていない自分なんて、一生仕事できないんじゃないかと完全に自信を失い逃げるように家に帰ってしまいました。その後も、面接に行ってもどうせ相手にされないだろう、企業が自分を雇ってくれるなんてありえないだろう、といった悪いイメージが頭の中にずっと残ってしまいました。

それから生活が昼夜逆転ははじめ精神的におかしくなり不眠症になりました。寝ることができて1～2時間しか寝られず、一睡もできない日が1週間のうち2,3日あったと思います。人の目が気になり始めて、夜中しか出歩けなくなりました。毎日空を見上げながら昔のことばかり思い返し後悔しつづける生活が続きました。ひきこもり始めてから約14年が経過していました。

うつ病と診断され通院生活を始める

そんなひきこもり生活を続けている自分を見かねた母親が、市の広報に載っていた相談機関に連絡してみることを勧めてくれました。震えながら電話をかけて予約し、無料相談してくれることが決まりました。家族以外と話すのは7年前のハローワーク以来でしたので、当日は本当に緊張したことを覚えています。ただ静かな場所ですごく優しく聞いてくれたので思わず泣きながら今までのことを打ち明けることができました。今まで誰にも言えないことばかりだったのでホッとしました。

その後相談機関の方に「精神が弱ってると思うから病院に行ってみたらどうですか？」と心療内科を紹介されました。今まで心療内科は行ったことがなかったので抵抗がありましたが、勇気を出していくことにしました。それでも自分は病んでないんだ、ちょっと疲れているだけだと思っていました。うつ病と診断されました。ショックでした。

それから通院生活が始まります。仕事をしておらず医療保険を使えなかったため、親に迷惑をかけてる罪悪感があり、行けなくなる時期もあったのですが、相談機関の方が「自立支援医療制度」というものを教えてくれて、なんとか通院生活を続けることができました。通院のおかげもあり、少しずつ寝られる時間が増えていきました。

家族以外とコミュニケーションを取っていない自分なんて、一生仕事できないんじゃないか

— ひきこもり本人 Bさん(40代)



働ける自信はなかったが就労支援を受けようと決意した

しかし人の話を聞いたり話したりするのに抵抗があるのは変わらなかったため、そのことを相談機関の方に相談したところ、別の民間団体が、同じような悩みを持っている人たちが集まる居場所を開いていると紹介してくれました。

連絡せずに民間団体に行き、入り口でウロウロしてたら、社員の方が案内してくれました。中に入ると、ゲームをしている人たちがいて、アットホームな感じでいいなあと思いました。その後直接代表の方と話することができて、一緒に毎日の生活ルーティーンを作って週に1回1時間会って話しましょうと言ってもらえました。

体調を報告したりたわいもない会話をすることが1ヶ月半ほど続いた後、少しずつ頑張ってみようかなという気力が出てきて、正直なところまだ働ける自信はありませんでしたが就労支援を受けたいと伝えました。普通は週2,3から始めて、慣れたら通う時間を増やしていく人が多いとのことだったのですが、焦りもあり時間も有り余っていたので週5で入ることにしました。

緊張して神経質になりお腹をくだすこともありましたが、単純作業の仕事だったことと、同じような精神疾患を持つ方が周りにいたこともあり働き続けることができ、契約利用を初めて半年後の現在は、正式にパート社員として働いています。仕事して疲れるようになったからかもしれないですが、今では薬なしで寝られるようになりました。健康的な身体つきになってきた気がします。

ひきこもり生活には中毒性があった

振り返ってみると、ひきこもり1年目はすごく楽しかったと思います。朝が来ても誰とも会わなくていい状況が嬉しくストレスもありませんでした。時間があつたので色んなところに出かけていました。しかし2年、3年とたつごとにどんどん人との繋がりも途絶え、5年目くらいに苦痛を感じ始めました。将来のことを考えると怖くなり、自分が人間じゃなくなってくる感覚があり、母親に迷惑をかけている罪悪感も抱えていました。

しかし、この生活をやめられない中毒性があり、明日からがんばろうがんばろうと、頭の中ではずっと考え続けているのに一日が終わる。その繰り返しでした。自分の力ではどうしようもできなかったため、あの時母親に勧められて相談機関に相談したことは本当に良かったと思います。

まだまだ将来のことを考えると不安はありますし、相変わらず人と話するときの緊張は抜けませんが、これらはおそらく一生付き合っていく問題だと思い毎日を過ごしていきたいです。

「人生をかけて償え」と言われてショックだった

私の子どもは、就職活動の時、自分でインターネットで調べて、大手の会社に就職することになりました。もともと学生時代に不登校だった時期が多かったこともあり、これまでの人生を取り返さないという思いがあったんだと思います。就職後、先輩社員の指導が厳しかったことが理由で挫折してしまい、病気休職することになりました。12月まで休み続け、そろそろ行かないといけないうことで職場復帰する予定だったのですが、会社の門の前でどうしても入ることができなかったので退職せざるをえなくなりました。それからいろんなところのバイトに応募してはやめ、応募してはやめての繰り返しでした。彼女に聞くと、どこも自分のいる場所じゃなかったと感じていたようでした。

家にいる間は「私の人生の責任を取れ」「あの時もっと向き合ってくれてたらこんなことにはならなかった」と言われることもあり、私の気持ちが落ち込むことも多々ありました。特に「自分がこうなったのはお前のせいだから人生をかけて償え」と言われ、激昂して壁を叩いて大きな音を出された時は、かなりショックをうけました。

家族会に参加して気持ちが楽になった

そんな時に、ひきこもり支援をしている施設が一覧で載っているガイドブックを見つけました。公的なところに行くよりは、NPOなどの民間へ相談するほうが気が楽だったこともあり、民間の団体3ヶ所ほど問い合わせしてみました。すると、各地で「家族会」というものが開催されているので、まずはそこに参加してみてもどうかと勧められました。家族会に参加してみると、私が想像していた以上に、子どもが発達障害やひきこもりの問題で悩んでいる親御さんがたくさんいることを知ったんです。少し気持ちが楽になった気がしました。

家族会に参加した後、団体の方に相談する時間があったのですが、その時に言われて印象的だった言葉が2つありました。それは「まずはお母さんが元気になることが大事です。」と「娘さんの良いところを教えてください。」でした。特に「娘さんの良いところを教えてください。」と言われたことは目からウロコというか、その言葉を聞くまでは、娘を見ていて良いところなんてないと思っていましたが、しばらく考えているうちに他人と比べてもしょうがない、元気に生きているからそれでいいじゃないかと考えを改めるようになりました。状況が改善したわけではなかったのですが、なにか自分の心が救われた気がしました。

激昂して壁を叩いて
大きな音を出された時は、
かなりショックをうけました。

— ひきこもりの子どもがいる Cさん(娘:30代)



自分の希望を押し付けず、待ち続けている

他にも、家族会を通じて出会った皆さんには大切なことを教えてもらいました。気分の揺り戻しがあることや、焦らず待つことがなによりも大事だということ。皆さん色々なことを試したり実践したりしていたので、最初は自分も手を尽くさないと焦る気持ちもありました。しかし、あくまでも行動するのは本人なので、世の中の常識やわたしが正しいと思っているアドバイスを押し付けたとしても、娘にとっては間違っているかもしれません。今はとにかく待ち続けて、本人が気づくタイミングを待っているところです。

今娘は32歳になりましたが、本人が気づいたらいくらでも仕事はあるでしょうし、きっと就職できると思っています。私の希望としては、就労支援の制度を活用してほしいし、社会規範を学んでほしいとは思っていますが、決めるのは本人ですので強制はしていません。以前の私であれば、一人で問題を抱え込んで、できるだけ早く子どもを自分の希望通りに動かそうとしていたかもしれません。しかし今は、相談できる場所や同じ悩みを持つ人に出会えたので、心を穏やかに待ち続けられるようになりました。

親が楽しそうに生きていることは大事

家族会に初めて参加してからというもの、今では家族会が、私の月に1度の楽しみになっています。親が楽しそうに生きていることは大事だと思います。娘は、私に通っているような場所には行きたくないと言っていますが、子どもは親のことを毎日観察しているものだと思いますし、もしかすると興味がわくタイミングが来るかもしれませんので、今は一人で楽しく参加させてもらっています。それに自分の気持ちが病んでいたら、気長に待つことができなくなりますからね。



2, 生活に困りごとや不安を抱えている方へ

自立相談支援事業

制度 就労支援 経済的支援

支援員が相談を受けて、どのような支援が必要かを相談者と一緒に考え、具体的な支援プランを作成します。
※生活困窮者自立支援制度

就労準備支援事業

制度 就労支援

「社会と関わるのが不安」「他人とコミュニケーションがとれない」など、直ちに就労が困難な方に6月から1年の間プログラムにそって就労に向けた支援や機会の提供を行います。※生活困窮者自立支援制度

就労訓練事業

制度 就労支援

直ちに一般就労することが難しい方のために、その方に合った作業機会を提供しながら、個別的就労支援プログラムに基づき、一般就労に向けた支援を中・長期的に実施します。※生活困窮者自立支援制度

住居確保給付金

制度 就労支援

離職や休業などにより住居を失った方、または失うおそれの高い方には、就職に向けた活動をするなどを条件に、一定期間、家賃相当額を支給します。
※生活困窮者自立支援制度

家計改善支援事業

制度 経済的支援

家計の見える化、課題やゴールの共有を行い、利用可能な制度への活用や、債権者等との調整への支援を行います。(この事業を実施していない市もあります。)
※生活困窮者自立支援制度

生活保護

制度 経済的支援

自分の力では生計を維持できない人に対して、国が健康で文化的な最低限度の生活を保障し、経済的な援助を行う制度です。

ご家族に向けたヒント

勇気と不安を抱いてリハビリにチャレンジ

▶さらに学びたいご家族のために

家族会とは、精神障がいがある方やひきこもりの方を家族にもつ親御さんが、お互いに悩みを分かち合い、共有し、ときには一緒に勉強することができる場所です。開催日時や場所など詳しく知りたい場合は、最寄りの相談窓口までお問い合わせください。

ご家族が元気であることが大切

ひきこもりの支援を進めていくためには、ご家族が元気であることが大切です。ご本人が思い悩んでいる状態で、「親が楽しんでいいんでしょうか」と言われるご家族もいらっしゃるかもしれません。しかしご家族に元気がないと、ご本人のことについて相談する余裕がなくなってしまいます。まずはご家族が楽しみの時間を持ち、元気でいられることがとても大事です。

相談機関を利用してみる

相談機関や家族会などをうまく利用することも大切です。ご家族が社会と繋がること(ひきこもりについて第三者に話すこと)が、ご本人により影響を与えます。状況は一人ひとり違うため、改善する方法も様々です。「おもしろいな」「やってみようかな」と思えたところだけを、生活のヒントにしていくことをオススメします。

1, 就労を希望している方へ

地域若者サポートステーション

相談機関 就労支援

15歳～49歳を対象に、キャリアコンサルタントなどによる専門的な相談、コミュニケーション訓練などによるステップアップ、協力企業への就労体験などにより、就労に向けた支援を行っています。

3, 医療機関にかかっている方へ

障害者就業・生活支援センター

相談機関 就労支援 生活支援

障がいのある方で就職を希望される方、「会社で働くこと」「地域で生活すること」に関して悩みや困りごとがある方に対して、就労と生活の両方から相談・支援を行います。

香川障害者職業センター

相談機関 就労支援

障がいのある方に対して、就職に向けた相談・支援から就職後のフォローアップまで、一連の職業リハビリテーションサービスをハローワークとの密接な連携のもとに行っています。

障害福祉サービス

制度 就労支援 生活支援

一般企業への就職を目指す方向けの「就労移行支援」と就職が困難な方向けの「就労継続支援」のどちらかを受けられます。就労を目指す前に、生活スキルの訓練をおこなう「自立訓練(生活訓練)」を受けることもできます。

自立支援医療(精神通院医療)

制度 経済的支援

精神疾患のために通院し、医療を継続的に受けるときに、医療費の自己負担額を軽減する制度です。

障害年金

制度 経済的支援

病気やケガによって生活や仕事などが制限されるようになった場合に受け取ることができます。

4, 交流の場

居場所

交流

県内各所で、ひきこもりや孤立化などで生きづらさを感じる方のための場として定期的に開催されています。グループ活動やボランティアなど、社会参加するきっかけとして利用できます。

家族会

交流

県内各所で、同じ境遇のご家族が参加し、参加者同士で相談しあったり、情報共有する場として定期的に開催されています。



※ 記載してある相談機関・制度は、ひきこもり相談において利用される機会の多いものになります。上記以外の相談機関・制度をご利用いただける可能性もありますので、くわしくは最寄りの相談窓口までお問い合わせください。

相談機関を有効活用するための順序とポイント

1. 担当者と一緒に今後の方針について話し合う

状況は一人ひとり異なるため、決まった解決策があるわけではありません。担当者と一緒に考えていきましょう。

2. 決まった方針を試してみる

ある程度方針が決まったら、その方針に従ってしばらく試してみましょう。

3. うまくいかなければ修正する

試してみた方法がうまくいっていないように感じることもあるでしょう、その場合は再度担当者と話し合います。その際に、不安を伝えることは大切です。どんなことでも打ち明けてみてください。

ご本人についての情報が多ければ 充実した話し合いになる

話し合いを継続するにつれて、ご本人に関する情報が増えていきます。情報が増えれば増えるほど、話し合いが充実したものになります。新しい解決策を思いつく可能性も高まるでしょう。

ひきこもりに関する知識が増えると 効果的な関わり方ができる

相談機関の利用を続けているうちに、ご家族のひきこもりに関する知識も増えるでしょう。情報が増えることでご本人への関わり方について柔軟に考えられるようになってきます。より効果的な関わり方ができる可能性が高まります。